

映画タイトル	The Last Samurai (ラストサムライ)
製作年	2003年 (アメリカ)
DVD 情報	日本で入手可 (154分)
監督	エドワード・ズウィック
映画について	渡辺謙をはじめ、多数の日本人俳優が出演し、その後日本人俳優がハリウッドに進出する契機となった作品。
主要キャスト	トム・クルーズ (ネイサン・オールグレン大尉役)、渡辺謙 (勝元盛次役)、小山田真 (信忠役)、小雪 (たか役)、真田広之 (氏尾役)、ティモシー・スポール (サイモン・グレアム役)、原田真人 (大村松江役)、中村七之助 (明治天皇役)、トニー・ゴールドウィン (バグリー大佐役)、伊川東吾 (長谷川大将役) ほか
あらすじ	ネイサン・オールグレン大尉は、インディアン討伐に優れた功を残したが、殺戮の悲惨さと虚無感から酒浸りの日々を過ごしていた。そんなとき近代化に急ぐ明治政府は、ネイサンをお雇い外国人として招聘し、勝元盛次ら政府に反対する武士たちを討伐するため軍事力の増強を図ろうとする。ネイサンは兵の訓練を始めるが、準備が整わないまま反乱武士の討伐を命じられ、結局囚われの身になってしまう。勝元のもとで暮らし始めたネイサンは、次第に侍たちの生き方に共感していくが...
英語の特徴 発音・文法・語彙	<p>この映画では、主人公のトム・クルーズ以外、主要なキャストを日本人俳優が占めているため、日本英語をたくさん聞くことができます。ここでは大村役の原田真人、勝元役の渡辺謙、勝元の息子役の小山田真、そして明治天皇役の中村七之助の英語を見てみます。(なお、渡辺謙は本作に挑戦する前は英語があまり話せず、奈良岡陽子らに猛特訓を受けて英語をこなしたとのこと。原田真人は米国在住歴もあり、役柄に合わせて難易度の高い英語を使っています。また小山田真は留学中オーディションを受けて勝元の息子役を射止めた俳優で、本来の英語力よりも「下手な英語」を使うよう指示されたということです。)</p> <p>まず、ネイサンを招聘しに来た役人、大村のセリフです(0:08:00~)。(和訳は割愛) “He’s Samurai. The <b>word</b> you might use is “warrior.” (...) “<b>Please excuse</b>. What is funny?” 次に、勝元が初めてネイサンと言葉を交わすシーンです (0:42:57)。“<b>General</b> Hasegawa asked me to help him end his <b>life</b>.” 次は、ネイサンに剣の稽古をつける信忠のことばです(0:56:58)。“<b>Please forgive</b>. Too many mind. Mind the sword, mind people, watch, mind the enemy.” 最後は、明治天皇がネイサンの挨拶を受けたシーン(0:14:44)</p>

	<p>と、勝元の死の知らせを受けて語ったシーン(2:20:24)です。Thank you <u>very much</u>. / I have dreamed of a <u>unified</u> Japan...of a <u>country strong</u> and independent and <u>modern</u>. And now we have <u>railroads</u> and cannon, <u>Western clothing</u>.</p> <p>これら一連のセリフにおいて、やはりまず特徴的なのは、/r/や/l/の発音です。かなり注意して発音されていますが、<u>general</u>, <u>life</u>, <u>railroads</u>などが日本語のラ行音になっています。特に/r/と/l/が近接する単語はその傾向が強いように見受けられます。また/f/の音も日本語の「フ」になりやすく(<u>life</u>, <u>forgive</u>)、/v/も/b/のように聞こえます(<u>very</u>)。さらに <u>word</u>, <u>modern</u>, <u>western</u> は日本語でもよく使われるせいか、「ワード」「モダン」「ウェスタン」と日本語のような発音になっています(/r/も発音されていません)。さらに細かいことですが <u>railroads</u> の ds については、単に/z/と発音されています。</p> <p>その他、外国人であることを意図的に示すためと思われるが、“Please excuse.”や“Please forgive.”のように他動詞を目的語なしに単独で使ったり、“too many mind”のように単複の一致がされていない場合があります。</p>
映画のみどころ	<p>これまでアメリカ映画で描かれた日本の姿は、日本人の目で見ると日本らしくないものが多かったのに比べて、本作では日本人役には日本人俳優をあて、真田広之ら日本人俳優の助言にも耳を傾けて作られたからか、日本国内でかなり好評を博しました。内容もさることながら、日本の観客にとっては、日本人俳優がハリウッドで活躍したこと自体、歓迎すべき成果と受け止められたと思われます。実際、渡辺謙はアカデミー助演男優賞にノミネートされるなど迫真の演技を見せましたし、他の日本人俳優の演技も一見の価値があります。</p> <p>一方、内容に関してよく聞かれる批判は、史実とはかなり異なるところ、切腹、桜、富士山、忍者といった日本文化の「記号」を使って、アメリカの観客にわかりやすい日本像を提示しているところなどでしょう。また、なぜ勝元は流暢な英語が話せたのか、という指摘もあります。そこは確かに唐突ですが、個人的には、勝元の正当性をさらに高める効果があったと思います。英語が話せるという設定にすることで、勝元が単に保守的で伝統を維持するために武士道に固執していたのではなく、知識人であり海外の状況も理解しようとする姿勢を持っていたと解釈できるのではないのでしょうか。なお、「ラストサムライ」とは、果たして勝元を指すのか、ネイサンを指すのか、多くの人が議論しています。</p>